

# 日本人学習者を対象とする中国語教授法の研究

任 利

キーワード：中国語教授法，日本人学習者，母語干渉，言語転移

## 要 旨

本稿は，日本人学習者を対象とする中国語教授法の研究を試みるものである。日本人学習者は中国語を習得する時に，文法を中心とした読解力が強い反面，母語干渉などのため会話力が低いなどの問題点も抱えている。本稿では，従来の伝統的な中国語教授法を振り返り，日本人学習者は会話力が低いという結果になる原因を追究しながら，中国語教育の実態を改善するための実践を試みた。その結果，日本人学習者を対象として中国語を教える際には，学習者中心の授業を目指し，文法中心に作成されている現在の教科書の枠組みにこだわらない新教授法への発想の転換，及び独自の授業の展開への積極的な取り組みが必要であると主張した。

## 1. はじめに

本稿は，日本人学習者を対象とする中国語教授法の研究を試みるものである。

日本人学習者は，中国語を習得する時に，文法を中心とした読解力，翻訳力が強い反面，会話力，聴解力が低いなどの問題点を抱えている。なぜこのような結果になったのであろう。本稿では，まず，従来の中国語教授法を振り返り，日本人学習者の問題点を追及する。それから，日本における中国語教育の現実と課題を問い直し，それに対する筆者なりの今までの中国語教授法に対する研究姿勢，及び実践的なアプローチなどを述べ，方法論として提起していきたい。

## 2. 従来の中国語教授法とその問題点

「日本人は，中国語が読めるが話せない」とよく言われている。つまり，日本人学習者は，中国語を習得する時に，文法を中心とした読解力・翻訳力が強い反面，中国語での会話力・聴解力が低いという問題点を抱えている。

なぜ，このような結果になったのであろう。

もちろん，様々な原因が考えられる。例えば，その一つに，日本語と中国語は，言語の系統的にはかなり異なった言語である，ということがある。表面から見ると，日本語と中国語が多く漢字を共有していて，語彙も似ているため，語彙の習得はかなり楽になるが，言語間の距離によって，音声，文法の側面に関しては非常に異なる。そのため，日本語を母語とする学習者にとって，中国語の習得が難しい，ということになる。また，日本人学習者の動機付けが低いことも原因の一つである。つまり，日本にいれば，中国語が使える

くても実際問題としては困らない。もちろん、その他、様々な要因が考えられる。

ここでは、主に従来の中国語教授法からその原因を探ってみることにする。

従来の中国語教授法といえば、まとめていうと、文法訳読教授法とオーディオリンガル教授法を中心とする教授法であると思う。特に、前者の方は従来から伝統的な中国語教授法として重宝されており、現在、日本の大学における中国語授業の多くは、まだこの方法を広く使っていると思われる。これは、古くから続いている最もオーソドックスな教え方である。一方、後者のオーディオリンガル教授法はアメリカで発展した。オーディオを取り入れて、口頭練習をする方法として定着した教授法である。

## 2.1 伝統的な中国語教授法の目的

現在でも一般的に使われている伝統的な中国語教授法、つまり文法訳読教授法は、その目的を簡単にまとめると、中国語の文法規則を学び、翻訳により中国語の文献を読めたり、日本語を中国語に訳せるようにすることである。したがって、授業では対訳により与えられた中国語語彙を暗記させる。中国語の言語構造や文法規則を詳細に記述し、説明する。文法項目の入った文章を日本語に翻訳する、というようなことが行われる。

## 2.2 伝統的な中国語教授法の特徴

伝統的な中国語教授法の特徴を簡単にいうと、文法学習を中心とするアプローチである。

具体的にいえば、その教育課程は、①導入、②説明、③練習、④応用、⑤テストという流れに従っている。

- ①導入では、まず、中国語の文法規則は、個々の言語項目別に学習されるべき体系として提示されている。
- ②説明では、中国語の言語構造や文法形式などが教師の説明によって提示される。
- ③練習では、文法規則の正しい形式に焦点を当てるため、意味内容のきわめて乏しい練習やドリルが学習者に与えられる。
- ④応用では、「適当な」量の練習の後に、教師は学生に、いくらかでも実際に近い会話でその規則を応用させようとする。しかし、文法規則の応用に焦点をあてようとするので、どうしても歪みが生じ、大抵は実際の中国語会話らしくなくなってしまう。
- ⑤テストでは、中国語の文法規則についての知識がテストされる。

以上の教育課程の循環が新しい文法形式ごとに適用されるのである。

## 2.3 伝統的な中国語教授法の利点

従来の伝統的な中国語教授法、つまり、文法訳読法を中心とする教授法は、以下のような四つの利点がある。

まず、教師にとっては、学習者の人数が多くても対応できるという利点がある。

次に、教師の助けがなくても、中国語の辞書と文法書があれば、学習者が自習もできる。

さらに、学習者が中国語を日本語に、日本語を中国語に訳す力を身につけるには、効率

のよい教授法である。

そして、最も重要な利点としては、担当の教師が中国語を母語とする者でなくても、中国語を聞いたり話したりできなくても、中国語を教えることができるということである。

以上の利点があるため、従来の伝統的な教授法は、ある意味では重宝な教授法であるといえる。

しかし、一見、文法を中心とする教育課程では、読解力・翻訳力を重視しているようであるが、中国語の辞書を引き、文法を分析しながら或る程度の解読はできても、本当の意味での読解、中国語を母語とする者に近い読みはなかなかできるようにならない。そのため学習者は口頭による話す能力を身につけることは非常に難しくなる。

また、文法中心で教えると、言語転移が起こりやすくなる。つまり、学習者は自分の母語の日本語を使って、中国語を勉強しているため、母語の影響あるいは干渉が現れやすい。

その結果としては、「日本人は、中国語が読める。筆談によって中国人と交流することができるが、中国語で自分の考えなどうまく口頭で話すことができない」という現実の姿になった。

## 2.4 伝統的な中国語教授法の問題点

以上のことから、従来の伝統的な教授法は以下のような重大な問題を抱えている。

- I, 文法学習中心の教授法のもとで学んだ学習者は、一般的には、読む作業に完全に依存してしまうようになる。
- II, 文法学習によってかなり高いレベルの言語知識も持ちながら、実際の場面での情報交換となるとあまりできない学生は多い。即ち、文法テストで成績がよければ、うまく話せるだろうと単純に考えがちであるが、ほとんど初心者向けの中国語教育課程では、言語知識のレベルが高いのに、伝達能力は無に等しい。
- III, 効率的に日本語を中国語に訳すために、学習者が日本語の文字体系に強く依存してしまう。日本語の文字体系が中国語の文字体系の学習に干渉することが多い。
- IV, 学習者は、記憶すべきことを記憶するために、自分勝手に音を書きとめる方法を考えざるをえない。特に、中国語の漢字の上に日本語の表音文字（片仮名）をつける傾向が強い。これは母国語としての日本語の発音の習慣が、中国語の発音の中に取り入れてしまう結果となる。

## 2.5 オーディオリンガル教授法の利点と問題点

オーディオリンガル教授法はアメリカで発展した教授法であり、日本における中国語教育への影響も大きい。この教授法は、日本語による文法説明を行う日本人教師と、ドリルを担当する中国人教師によるチームで授業を行う。大学の中国語学コースでは、好まれる教授法である。

典型的なオーディオリンガルの授業では、文法説明や言語に関するディスカッションが行われない。学習者が多くの例から規則を導き出していく。教室では、以下の流れに従う。

まず、簡単な中国語の会話によりコンテキストが導入される。

次に、学習者は模倣と反復により中国語の会話を暗記する。

それから、会話に出てきた中国語の文法のパタンを取り出して、ドリルを行う。教師はドリルのキュー（刺激）を出して、学習者がそれに反応するという形で授業が進む。

大学などの教育機関でLL教室を作り、そこでテープによる音声の模倣練習を行うことはオーディオリンガル教授法の重要な特徴である。この教授法では、誤りは厳しく訂正され、学習者の言語行動を形成していく。特に、音声が重要であるとされたので、正確な発音による話し方が強調される利点がある。

しかし、オーディオリンガル教授法は、口頭練習の方法として今ではすっかり定着することになったが、口頭練習といっても音声のみで単なる口の運動に終わり、教師に出すキューを機械的になぞるだけになってしまうという問題点がある。

また、現在、大学では典型的なオーディオリンガル教授法ではなく、日本語による詳細な文法説明が行われる。つまり、文法の時間とドリルや応用の時間を分けて、授業を行う形式となる。ドリルや応用の時間を担当する中国語を母語とする教師の不足の場合、この教授法の効果は大分下がる。

最も問題になるのは、ドリルをする時、学習者は、記憶すべきことを記録するために、自分勝手に音を書きとめる方法をとる傾向が見える。即ち、学習者が、母国語である日本語の発音の習慣などを使ってしまうという問題点がある。

### 3. 効果的教授法の実践

伝統的な中国語教授法を含めて、従来の中国語教授法は、それぞれの利点と問題点を抱えているが、日本における中国語教育の歴史と実態を知る上で、特に、これからの中国語教授法の改善に多くの示唆を与えてくれることは確かであると思う。

伝統的な教授法としての文法訳読教授法や、オーディオリンガル教授法の共通点は、どちらも言語の「意味」ではなく、言語の「形式」に教授の重点を置いていることである。

言語習得の目的はコミュニケーションの能力を身につけることであるため、より効果的な教授法が中国語その言語の「形式」に焦点をあてるのではなく、言語の「意味」、即ち、言語を使って意味を伝えることに重点を置く教授法であるべきといえる。

筆者が今まで携ってきた中国語教育を含めて、日本人学習者を対象とする中国語の教育では以下の二点をポイントとして教授法の実践を積み重ねた。

- a. 学習者中心の授業を目指し、文法中心に作成されている現在の教科書の枠組みにこだわらない。学習者が自分の母国語である日本語に依存せず、中国語を使いながら学習する。
- b. 教室では、学生の中国語に対する興味をかきたて、正確で美しい中国語が流暢に話せるだけではなく、学生一人ひとりの現在の実力を知りつくすために、独自の授業展開に積極的に取り組む。

#### 3.1 言語転移を利用する教授法の試み

教室では、具体的には、音声の面、語彙の面と文法の面から言語移転を利用する教授法

を試みた。

言語転移とは、簡単にいえば、「母語の影響」もしくは、「言語間における影響」と呼ばれるものである。言うまでもなく、言語転移はすべてよいわけではない。「母語の影響」で間違った表現になった場合は「負の移転」となる。中国語でも日本語でも、同じような表現を使い、そのまま応用する場合は「正の移転」となる。どちらの場合でも、心理的プロセスは同じであるが、結果が正しい場合と間違いになる場合が出てくるのである。

また、言語間の距離が近いほど言語転移が起こりやすい、とよく言われている。中国語は、発音も意味も文法もすべて日本語とは別の体系をもつ言語であるため、言語間の距離が遠くなるが、言語転移を教授法には使えないわけではない。

まず、音声における言語移転と「ピンイン」の習得についてであるが、音声は母語影響の強い分野と考えられる。つまり、「正の移転」よりむしろ「負の移転」のほうが強いのである。

中国語の発音は一般にピンインを使って学習する。ピンインは、日本語の仮名と同様、発音を示すための表音文字ではあるが、音声記号ではない。

「ピンイン」には、日本語にはない音がたくさんある。日本語にはない音であるため、音声の区別できない場合が多い。実際、初級クラスでついていけなくなる学習者は中国語の音を聞き取れない場合が多い。

例えば、単母音の [o] [e] [ü] [er], 二重母音の [ai] [ao] [ia] [ie] [uo] [ei] [ou] [üe], 三重母音の [iao] [iu] [uai] [ui], 二重母音のあとに [n] がくっつく形のもの, [ian] [uan] [uen] [iang] [uang] [ueng] など。

母音の学習においては最も複雑なのは「二重母音+n」のタイプである。日本人学習者は、いわゆる [n] と [ng] の差に敏感ではないからである。[n] か [ng] かの判断に迷ったとき、日本語の音読の知識を使うと、弁別しやすくなる。いくつかの例外もあるが、日本語で「ん」で終わる漢字は、例えば、参(さん), 分(ふん), など、中国語ではすべて [n] で発音されるという要領を覚えると、参考になるかもしれない。この点については、木村(1996:90)が既に指摘している。実際の授業では、発音のみに長い時間をかけることは難しいが、音の識別能力を高める指導により、救える学習者が初級には特に多い。

子音の学習に関しては、[zh] [ch] [sh] [r] および [f] 以外、ほとんど日本語にはある音とよく似ている。筆者の教育上の経験からいうと、よく似ているということを積極的に使うことによって、さらにマスターしやすくなる。

例えば、[b] を日本語の「ば」の子音、[m] を日本語の「ま」の子音、[d] を日本語の「だ」の子音、[n] を日本語「な」の子音、などに連想すれば、それほど難しくないはずである。

ただし、中国語の表音文字ピンインを日本語の表音文字カタカナで写すのはよくない。例えば、[m] (マ) [n] (ナ)。つまり、中国語の音を日本語の音に置き換えようとする。それではいつまでたっても中国らしい発音が身につかない。

極端な例をいうと、ピンインの [q] を日本語のカタカタの [チ] と表記する。しかし、[チ] のローマ字表示は [chi] となるから、結局、[chi] と [qi] の区別ができなくなる。中国語のピンインの読み方にはそれなりの約束ごとがあるため、日本語のローマ字読み

の発音や英語のアルファベットの読みがそのまま当てはまるわけではないが、言語転移を利用し、日本語のローマ字表示の知識、英語習得の知識をそのまま生かしてマスターできる場合もある。

例えば、ピンインの [f] [l] は本来、日本語にはない子音であるが、英語の face の [f], late の [l] を習ったときの経験を生かせばそれほど難しくない。また、よく日本人は中国語の [l] と [r] の区別ができないといわれている。それは、日本語では、[l] と [r] が区別されないから、日本語の母語話者はこの区別をするのは容易ではないのである。ただし、これらに関しては、中国語の音声は日本語よりずっと英語に近いので、知っている英語の知識を「英語から中国語へ」というストラテジーをとったほうが効果的になる。

もちろん、語彙と文法の面においても言語転移が働く。語彙の面と文法の面に分けてみると、語彙の意味のほうは比較的一対一対応を作りやすい。語彙に関しては、言語転移は大きくなる、それに対して、文法に関しては、そう簡単に一对一対応を作ることはできないので、移転が少ないということが考えられる。以下に二つの例を挙げる。

- ・名詞の単数・複数の対立がない。

中国語には、一般の名詞には単数複数の区別を示す形はない。一方、日本語も名詞の単数形と複数形の対立がない。人称代名詞に関しても、ほぼ対応している。

例：「我—我们」（「私」—「私たち」）, 「你—你们」（「あなた」—「あなたたち」）

- ・数を数えるとき、「数詞+量詞」の構造は日本語によく似ている。

例：「三个学生」（「三人の学生」）, 四支笔（「四本のペン」）

「五本书」（「五冊の本」）, 六张票（「六枚のチケット」）

数詞の後ろの「个」「支」「本」「张」が日本語の助数詞に相当する語で、中国語ではこれを「量詞」という、「数詞+量詞」という組み合わせが後の名詞を修飾する形で人や事物の数量を表す。日本語では、「数詞+助数詞」という組み合わせを名詞の修飾語に用いて人や事物の数量を表す。中国語と日本語はよく似た構造を用いる。

語順に関しては、中国語は「主語（S）+動詞（V）+目的語（O）」即ちSVOという語順を基本語順とするタイプの言語である。一方、日本語は「主語（S）+目的語（O）+動詞（V）」即ちSOVという語順を基本語順とするタイプの言語である。中国語は日本語と異なると判断しがちだが、以下の場合、中国語と日本語の間の対応関係は非常に似ている。日本人学習者にとっては、非常に習得が容易である。以下に三つの例を挙げる。

- ・中国語の「的」と日本語の所有格「の」の対応関係は非常にはっきりしている。

例：「我的本子」（「私のノート」）, 「王先生的朋友」（「王さんの友達」）

- ・連体修飾の場合、中国語は日本語と同じく「修飾語+名詞」の構造である。

例：「他送来的包」（「彼が届けてきたカバン」）, 「对阳光的向往」（「陽光に対するあこがれ」）

・連用修飾の場合、中国語は日本語と同じく「修飾語＋形容詞・動詞」の構造である。

例：「非常美丽」（「非常に美しい」），「拼命干」（「一生懸命にやる」）

このように、中国語教育では、学習者の母語との対照という視点が必要であると思われる。特に、成人の学習者には言語活動の中で母語の文法と対照させること、言語転移を積極的に利用することが有効であると思われる。

### 3.2 グループ教授法とリレー教授法の実践

教室では、グループ教授法とリレー教授法を試みた。授業の流れは以下の通りである。

指導の最初の段階では、日常、一般的に用いられる言い回しや頻度の高い基礎構文を含む対話文に基礎を置く。語彙の量は必要最小限に抑えておくので、学習者は構造をしっかりマスターすることができる。

まず、最初に、教師の声またはテープに録音されている中国人の声を注意深く聞き、学習すべき表現の音や抑揚を聞き分けられるまで聞く。

次に、教師のあと、またはテープのあとについて、正確になめらかに繰り返しできるまで反復練習する。

最初はクラスの全員のような大きいグループで始める。文を一斉に反復し、徐々に小さなグループ、例えば、クラスの半分、列ごと、へと移す。最後に、個人別学習となる。その後、もう一度クラス全体の一斉練習に戻す。もし、個人別の学習においてはマスターできなければ、小グループの反復練習へと戻す。

グループ練習のあと、リレー練習を行う。

クラスを二分したり、列ごとにしたり、あるいは教師とクラス全員という具合にして会話に出てきたキャラクターのせりふ、つまり、問いと答えを交換しあい、また何度もその分担を変えて、リレーのようにすべての学生が問いと答えのどちらをも練習できるようにする。

このようなグループ及びリレーの練習方法は、通常の教師主導の場合と違い、学習者に中国語練習の機会を多く提供できる。また、教師に指示されなくても学習者間で誤りを訂正したり、他の学習者の誤りを繰り返すことを避けたりすることができる。そして、活動的な教室の雰囲気を作り、学習者の学習動機を高めるという利点が挙げられる。

## 4. おわりに

本稿では、従来の伝統的な中国語教授法を振り返り、日本人学習者が文法を中心とした読解力が強い反面、会話力が低いという問題の原因を探るとともに、効果的な教授法の実践をした。

日本人学習者を対象として中国語を教える際には、学習者中心の授業を目指し、文法中心に作成されている現在の教科書の枠組みにこだわらず、新教授法への発想の転換、教室での独自の授業展開に積極的に取り組む必要があると主張した。

現在、中国語教育に課せられた最大の課題は中国語教育の科学化ということである。その科学化のための基本条件の一つは、教師側は、教室活動や教授テクニックそれぞれの意

義を理解し、さらに古い習得論や教授法の知識に引きずられないことであると思う。教師側が創意を以て教材の作成をし、新しい教授法の開発と導入など教室活動の工夫を自分なりに実践する姿勢が大切であると思われる。

#### 参考文献：

- 木村英樹 (1996) 『中国語はじめの一步』 筑摩書房
- Krashen, S., & Terrell, T. D. (1983). *The Natural Approach: Language acquisition in the classroom*. Oxford, UK: Pergamon Press.
- O' Malley, M., & Chamot, A.U. (1990). *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Oxford, R. (1990). *Language learning strategies: what every teacher should know*. Rowley, MA: Newbury House
- Pinker, S. (1994). *The language instinct*. New York: W. Morrow 『言語を生みだす本能』 上・下 (棕田直子訳) 日本放送出版協会
- Richards, J.C., & Rodgers, T.S. (2001). *Approaches and methods in language teaching*. 2nd edition. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Rubin, J., & Thompson, I. (1982). *How to be a more successful language learner*. Boston, MA: Heinle & Heinle
- Sawyer, M. & Ranta, L. (2001). Aptitude, individual differences and instructional design. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wesche, M. (1981). Language aptitude measures in streaming, matching students with methods, and diagnosis of learning problems. In K.C.Diller (Ed.), *Individual differences and universals in foreign Language aptitude*. Rowley, MA: Newbury House.
- White, L. (1989a). *Universal grammar and second language acquisition*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 『普遍文法と第二言語獲得：原理とパラメータのアプローチ』 (千葉修司, ゲビン・グレッグ, 平川真規子共訳) リーベル出版

(ニン リ 茨城キリスト教大学文学部専任講師)

## A Study on Teaching Chinese to Japanese learners

Li Ren

The aim of this paper is how to teach Chinese to Japanese learners. When Japanese learners are learning Chinese, their ability in grammar is high, but on the other hand, their speaking ability does not reach a high level. This paper, first reviews the major traditional Chinese teaching methods, tries to find the reasons for this difference. Then it describes a new method of teaching Chinese.